

氏名（本籍）	村瀬 瑠美
学位の種類	博士（コーチング学）
学位記番号	博甲第 9747 号
学位授与年月	令和 3 年 2 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動き

主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	佐野 淳
副査	筑波大学教授	博士（工学）	浅井 武
副査	筑波大学准教授		寺山 由美
副査	愛知教育大学教授	博士（学校教育学）	鈴木 裕子

論文の内容の要旨

村瀬瑠美氏の博士学位論文は、幼児の身体表現において、幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態と、イメージから動きがあらわれるまでの関係を明らかにすることを目的としたものであり、幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの関係を詳細に検討することは、幼児の身体表現を豊かに導く方法の明示につながると考えられ、本研究は遂行された。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章で著者は、本論文の問題の所在を述べ、先行研究の検討と理論的前提についてまとめている。

第 2 章で著者は、本論文の目的を述べ、本論文の目的を達成するための 2 つの研究課題について説明している。課題①は、「幼児期の身体表現活動における保育者の用いるオノマトペの実態 保育者の用いるオノマトペの性質・意味内容の分類」とし、課題②は「幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態 オノマトペによって想起するイメージから動きがあらわれるまでの関係」としている。さらに課題②では 2 つの下位課題、すなわち「課題②-1：幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態とイメージから動きへの関係を、課題①で得られたオノマトペの性質・意味内容の観点から検討すること」と「課題②-2：幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態とイメージから動きへの関係を、幼児一人一人のイメージと動きの観点から検討すること」を設定している。

第 3 章で著者は、「課題①：幼児期の身体表現活動における保育者の用いるオノマトペの実態 保育者の用いるオノマトペの性質・意味内容の分類」に関する研究内容を述べている。本章では、保育者への質問紙調査により、幼児の身体表現活動において保育者が用いるオノマトペの実態を調査し、幼児の身体表現活動において使用されるオノマトペの性質・意味内容の分類を提示した。その結果、

幼児の身体表現において保育者が使用するオノマトペの実態は、「頻度」「場面」「パターン」「形式」の4つの要素から明らかとなった。さらに、幼児期の身体表現活動において保育者が使用するオノマトペは、「動き」「もの・事象」「状態」「感覚」「その他」の5つの「大カテゴリ」に分類され、「動き」のカテゴリはさらに「動き—動き」「動き—行動の指示」の2つの「小カテゴリ」に、「もの・事象」のカテゴリは「もの・事象—生き物」「もの・事象—人工物」「もの・事象—自然物」「もの・事象—その他」の4つの「小カテゴリ」に、「その他」の「大カテゴリ」は「その他—特定の決まり・約束事」「その他—分類不能」に分けられることが明らかとなった。

第4章で著者は、「課題②：幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態 オノマトペによって想起するイメージから動きがあらわれるまでの関係」に関する研究内容を述べている。本章では、課題①で得られた分類をもとに幼児に対して実験と観察を行い、幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態について、量的・質的観点から検討された。その結果、幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの実態については、①幼児にとってイメージを想起させやすいオノマトペ、動きやすいオノマトペと、イメージは想起しやすいが動きにあらわしにくいオノマトペが存在する、②幼児が性質・意味内容の異なるオノマトペに対して、想起するイメージはそれぞれのオノマトペで異なり、導かれる動きには傾向が見られる、③幼児がオノマトペによって想起したイメージとあらわれた動きは4つの場合分けができる、の3点が明らかとなった。

第5章で著者は、それぞれの研究課題に対して得られた知見をまとめて示した上で総合考察を行った。幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動きの関係には、「する型」「になる型」「である型」の3つのタイプがあることを明らかにした。また、オノマトペから想起するイメージと動きの関係の3つのタイプと幼児の<自分>概念には関係が見られ、①<自分>の運動のイメージと<自分>の動き：「する型」、②<自分>でないもののイメージと<自分>の動き：「である型」、③<自分>でないもののイメージと<自分>でないものの動き：「になる型」の3パターンが明らかとなった。

第6章で著者は、本論文の総括として、幼児の身体表現におけるオノマトペの作用は、「オノマトペ単体が作用する次元は感覚・知覚に近いイメージと動きの範囲である」「パターン・形式・カテゴリの異なるオノマトペは異なる作用をする」「オノマトペは幼児の<自分>の捉えによって異なる作用をする」とまとめられ、本研究では、身体表現活動において幼児がオノマトペから想起するイメージと動きにおける関係の一端を、オノマトペの身体表現の過程での作用に着目して明らかにしたと論じている。そして最後に、本論文で得られた知見を教育現場へ活かすための提言を様々な角度から述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

幼児期の身体表現は、豊かな感性を育む活動として重要である。ゆえに、身体表現の指導についての研究の発展は期待されている。本研究は、保育者の指導言語の一つであるオノマトペと幼児からあらわれる動きに着目し、これまで明確にされてこなかった幼児の実態を実験により明らかとしたもので、保育現場の指導に寄与する研究として高く評価できる。ただ、幼児の発育発達との関連や生活体験との関連など、今後の課題も示唆された。幼児の身体と感性を育てる指導に貢献できる研究を今後も期待したい。

令和2年12月18日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。